

# 極覧

社研だより

第 97 号

令和 6 年 11 月

発行 京都市小学校

教育研究会社会科部会

責任者 京都市小学校

社会科教育研究会

當 麻 章 英

京都市小学校社会科教育研究会

会 長 當 麻 章 英

## 全国大会に向けて志を一つに

令和 6 年度、会長を務めさせていただくことになりました。歴史と伝統がある京都社研の会長を務めさせていただくという重責を担うこととなり、その責任と自分を育てていただいた恩返しという使命感をもち、研究会の発展に精いっぱい努めさせていただく所存です。何卒よろしく願います。

私は、新採の年から社研に入会させていただき 32 年目となります。同じことを続けることが苦手な自分がなぜ、長年続けさせていただくことができたのか改めて振り返ると、それは社研の諸先輩方や仲間との繋がりがだと考えています。自校の教職員仲間だけでなく、他校にも同じ志をもつ仲間がいるという繋がりが、現在の自分を築いてきた基盤となっています。研究会は研究会員一人一人にとってそのような組織でなければならないと考えています。今後も同じ志をもつ仲間と切磋琢磨し、繋がりを広げていく研究会として進んでいきたいと考えています。

さて、令和 6 年度からの 2 年間は、令和 8 年度の全国小学校社会科教育研究協議会京都大会の準備として大変重要な年になります。全国大会当日の会場校 3 校の子どもたちの姿は、それまでに社研で行われてきた数々の貴重な実践の集大成の姿になるようにと考えています。会場校の研究成果はもちろん、京都社研の研究実践の成果が当日の授業の根底に流れていることを全国からの参観者の先生方に感じてもらえる大会にしたいと考えています。そのためには、社研の各部、各部会が研究構想を中心に据え、自分の部署の目的を着実に進めていくことが大切です。その積み重ねが大会当日の授業へと繋がっていきます。各部、各部会で社研研究会員が生き生きと活動し、大会に向けて進んでいきたいと思えます。

夏季休業中には、今年度の「一日社研」が開催されました。たくさんの研究会員と極覧会の諸先輩方の参加で大変有意義な研修会となりました。

ご講演いただいた京都市総合教育センター 松村一也指導主事からは、「子どもたちは、先生の想像を超える」という題でお話をいただきました。新しい社会科教育の視点についてのお話や子どもが主体の授業の進め方など、すぐに授業実践に活かすことのできるお話をいただき、大変勉強になりました。また、今年度は極覧会の副会長 走井徳彦先生にもお話をいただき、京都社研の歴史と社研創設時から現在も変わらない子どもを中心にした社会科授業づくりについてお話をいただき、大変感銘を受けました。

昼からの研修では、今年度の社研の研究構想について、研究部 加藤俊介研究部長から提案があり、研究主題「#子どもが調べ考える社会科学習」について全員で共通理解することができました。大会までの研究を共通実践して進めていきたいと強く感じました。

京都社研の大切にしてきた理念、現在の社会科学習の重要なポイント、そして今年度の研究構想を一つに繋げ、令和 8 年度の全国大会に向けて実践を積み重ね、進めていきたいと考えています。研究会員一人一人の社会科に対する熱い思いを全国大会会場校 3 校で伝えられるよう、みんなで頑張っていきましょう！

## 多様な授業観が芽生える「今」だからこそ

京都市総合教育センター 指導室 指導主事 松村 一也

日頃より本市教育活動推進にご支援・ご協力  
いただいておりますこと深く感謝申し上げます。  
昨年度は教科書採択に伴い、京都市スタンダード  
の作成、副読本『わたしたちの京都』の改訂  
など、本市社会科教育の充実・発展に向けて、  
多大なるご支援・ご協力をいただきましたこと、  
改めて御礼申し上げます。また、微力ではござ  
いますが、今後も社会科教育研究会の皆様と共  
に、京都市の社会科教育の推進と発展のために  
尽力したいと思っております。どうぞよろしく  
お願いいたします。

さて、社会科の授業を中心に、京都市の様々  
な学校の校内研究に訪問させていただくなかで、  
「これからの授業は……」という言葉が多く耳  
にします。その言葉には、「これまでの授業観  
を見直し、これからの未来をよりよく生きるた  
めの資質・能力をつけることができる授業を構  
築していきたい」という思いが感じられます。  
研究の概要にも、「個別最適な学び」「学習者主  
体」「自由進度学習」といった言葉が表れてい  
ます。新しい考え方や言葉が出てくる時という  
のは、多様な授業観が芽生え、学校現場でも様々  
な授業実践が行われます。それに伴い、授業研  
究も活発になります。ただ一方で、教師の指導  
手法にとらわれがちになり、「子どもがどのよ  
うな力をつけることができているのか」という  
議論が不十分なままの事後研究会も見られるの  
ではないでしょうか。授業は、子ども達に資  
質・能力を身に付けていくために行うものです。  
ICT活用や単元構成の工夫なども、子ども達に  
資質・能力を身に付けていくための手法であっ  
て、目的ではありません。京都社研も、〴〵子  
どもの姿で示す、ということを大切にしてくま  
した。授業の成果は、子どもの姿で検証するもの  
であるということなどをはじめ、授業研究の本  
質とは何かということ、研究会の取組もって、  
京都市全体に波及していくことが大切だと  
考えています。

また、研究について国語教師として著名な故

大村はま先生の著書『新編 教えるということ』  
で記されている一節を引用させていただきます。

「研究」をしない教師は、「先生」ではない  
と思います。研究ということは苦しいこと  
です。ほんの少し喜びがあって、あとは全部苦  
しみです。その喜びは、かけがえのない貴重  
なものです。研究ということは、「伸びたい」  
という気持ちがたくさんあって、それに  
燃えないとできないことです。少しでも忙し  
ければ、すぐおろすになってしまいます。な  
ぜ、研究をしない教師は「先生」と思わな  
いかと申しますと、子どもというのは、「身の  
程知らずに伸びたい人」のことだと思うから  
です。一歩でも前進したくてたまらないので  
す。そして、力をつけたくて、希望に燃えて  
いる、その塊が子どもなのです。勉強するそ  
の苦しみと喜びのただ中に生きているのが子  
どもたちなのです。研究している教師はその  
子どもたちと同じ世界にいます。研究をせず、  
子どもと同じ世界にいない教師は、まず「先  
生」としては失格だと思います。いっしょに  
遊んでやれば、子どもと同じ世界にいられる  
などと考えるのは、あまりに安易にすぎませ  
んか。そうではないのです。もっともっと大  
事なことは、研究をしていて、勉強の苦しみ  
と喜びとをひしひしと、日に日に感じている  
こと、そして、伸びたい希望が胸にあふれて  
いることです。私は、これこそ教師の資格だ  
と思います。

大村先生の言葉は厳しさも感じられますが、  
研究を進めていくことの本質が何であるかとい  
うことが分かりやすく示され、教師として欠か  
すことのできない資質を考えさせてくれます。

多様な授業観が芽生える「今」だからこそ、  
研究の本質を見失うことなく、子どもはもちろ  
ん、教師自身が学び続けていくことができる授  
業研究を、私自身も研究会の皆様と共に積み重  
ねていきたいと思っております。

# #子どもが調べ考える社会科学習

～よりよい問題解決を見据え 自他に問い続けていく姿の育成を目指して～

研究部長 加藤 俊介

今年3年には「令和の日本型教育の構築を目指して」と、中央教育審議会より答申が示され、その中で今の社会の在り方そのものがこれまでとは「非連続」といえるほど劇的に変わる状況が生じつつあること、社会の変化が加速度を増し、複雑で予測困難となってきたことなどが指摘されています。答申では「生じつつある」と示されていますが、既にそのような状況は「生じている」と言えるのではないのでしょうか。予想を大きく上回るスピードで変化し続けるこれから世の中では、どのような人材が求められるのでしょうか。経済産業省の未来人材会議では、2030年、2050年における日本の労働需要として必要とされる能力に、「問題発見力」「的確な予測」「革新性」「情報収集」等が示されました。これまでに求められていた「責任感」「誠実さ」「注意深さ」「読み書き計算」等の能力と比較すると大きく変化しています。

しかし、これらの力は、社会科の学習でこれまでも大切に育んできた力です。様々な事象から問題を見出し、その問題の解決に向けた見通しをもち、問題を追究し解決を目指す、納得解や最適解を見出すことができる、そのような力の育成を目指し、問題解決的な学習をさらに進め、その充実を図ること、系統的にその力を育むことをより一層大切にする必要があります。そのためには、子どもたちが見出した問題について主体的に調べる学習を進めること、その中で子どもたちが自分たちの必要感から話し合うこと、そこからさらに考えを深め、さらに問いを追究していくこと、そのような学習を指導者が主導するのではなく、子どもたちが学びすすめていく学習の実現を図ることが重要となります。そこで、研究主題を「#子どもが調べ考える社会科学習～よりよい問題解決を見据え自他に問い続けていく姿の育成を目指して

～」としました。そして、この研究主題の実現に向け、これまでの実践を「主体的な学びの充実を図る3つの矢」と、「学びの確実な定着を図る2つの環」に整理するとともに、それぞれ2つの手立てを軸に、よりよい問題解決を見据え、自他に問い続けていく子の育成を目指します。来る令和8年度の全国大会京都大会に向け、実践を積み重ね、研究のさらなる充実を図ります。

## 壹の矢 学習問題の設定

- ①子どもたちが主体的に取り組める問いを設定する
- ②問いを見出す視点・方略をもつ

## 貳の矢 見通しの充実

- ①予想をもとに問い化する
- ②自らの学びを調整する見通しの振り返り

## 参の矢 調べる学習の充実

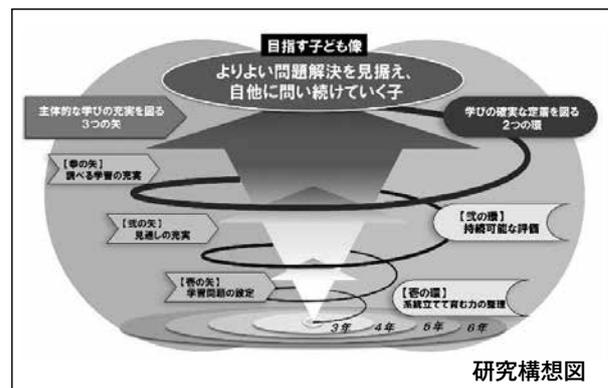
- ①子どもたちの主体性を核とした調べる時間の設定
- ②子どもたちが調べた事実をもとに意味を考える場面の設定

## 壹の環 系統立てて育む力の整理

- ①評価と学習改善
- ②子どもが生かす振り返り

## 貳の環 持続可能な評価

- ①見通すために
- ②調べるために



### 3年部会

#### ◇3年部会テーマ◇

地域の人々の営みから学びを深め、  
自分と地域とのつながりを  
考える子ども

3年部会では、地域の様子や人々の姿を通して学ぶことで、子どもたちの地域社会に対する誇りと愛情、地域社会の一員としての自覚を育てられるようにしたい。

今年度の研究提案を受け、部会テーマの実現に向けては、特に「主体的な学びの充実を図る三つの矢（学習問題の設定・見通しの充実・調べる学習の充実）」に重点を置きたい。

#### 3年部会テーマ実現のための方策

##### 学習問題の設定

子どもたちが主体的に取り組むことができるように、「なぜ」だけでなく、「どうすれば」や「これからは」などの問いを設定する。そうすることで、自分と地域とのつながりを考える子どもを育みたい。

##### 見通しの充実

昨年度の取組から、個別に予想を立て、調べる学習の見通しをもつことや、自らの学びを自己調整することに対しては、支援を必要とする子どもが多くいた。今年度も、3年生の子どもたちにとってのよりよい活動や支援を考え、実践していきたい。

##### 調べる学習の充実

昨年度同様、まずは、社会科の学び方や資料の見方などを丁寧に指導したり、問題解決的な学習のプロセスを大切にしたりする。その中で、子どもたちが立てた学習計画に沿って、自ら調べることや意味を考える場面の設定をしていきたい。昨年度の実践においても、個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実を図ることで、調べる学習場面においては、大きな成果が見られた。

##### 【授業実践予定】

「市の様子とくらしのうつりかわり」  
桂東小学校 清水 一希 教諭  
「安全なくらしを守る」  
山階南小学校 鯨本 零二 教諭

〈文責 紫野小 上田 亮介〉

### 4年部会

#### ◇4年部会テーマ◇

自分たちのくらしを支える人々のおもいや  
願いについて学びを深めることで、  
地域社会に対する誇りと愛情をもち、  
地域社会と自分とのつながりを考える子ども

4年部会では、京都府内の特色や自分たちのくらしを支える人々の姿を学ぶことで様々な見方考え方をすることを通して自分の住む地域を見つめ自分とのつながりを考え、地域社会に対する誇りと愛情をもてるようにしていきたい。

#### 4年部会テーマ実現のための方策

##### 学習問題の設定・見通しの充実

子どもたちが、調べ考える学習を展開できるようにしていくために、学習問題と予想を考えた後に「学習問題を解決するために何を調べればよいか話し合わせる」時間を設定したい。そうすることで、調べる内容が明確になり子どもたちが主体性をもって調べ学習を進められると考えている。

昨年度の実践を通して、何を調べればよいか話し合い、その内容を問い化することによって子どもたちの追究意欲が高まり主体的に調べる姿が見られたので、今年度も問いを大切に進めたい。

##### 調べる学習の充実

今年度は、調べる場面をどう展開すれば子どもたちがより考えを広げたり深めたりできるのか調べ学習を充実させていきたい。そのためには、どのような資料から調べさせることが有効か資料を精選することや、個人で追究する時間と協同的に追究する時間をどう組み合わせることがより考えることに繋がるのか検討していきたい。また、それぞれの子どもが追究活動をしていくので、その姿をしっかり見取り評価・支援をどのようにしていくのか研鑽を深めていきたい。

##### 【授業実践予定】

「用水のけんせつ ～琵琶湖疏水～」  
久世西小学校 兼山 柚紀 教諭  
「自然災害からくらしを守る」  
大塚小学校 勝部 順也 教諭  
「古くから受けつがれてきた  
産業のさかんな宇治市」  
川岡東小学校 岩瀬 亮太 教諭

〈文責 久世西小 仙波 俊輔〉

## 5年部会

### ◇5年部会テーマ◇

社会のあり様や、そこに生きる人々の姿から学びを深め、よりよい社会へ向けて、社会と自分とのつながりを考えようとする子ども

5年部会では、国土の特色、産業の現状、社会の情報化について、国民生活との関連を踏まえて理解すること、また、社会的事象の特色や社会に見られる課題を把握して、その解決に向けて社会への関わり方を選択・判断する力を養うとともに、それらを基に議論したりする力を養うことを中心に授業づくりを進めていきたいと考えている。

### 5年部会テーマ実現のための方策

#### 学習問題の設定

子どもの思考の流れを大切にした単元構想の工夫を図る。とくに子どもが捉える問いを大切にした学習問題を作り、そして、学習問題を追究・解決する問題解決学習を進める。

#### 見通しの充実

「自らの学びを調整する」という視点を単元構想の中に適切に位置づける。

社会にみられる課題を理解したうえで、よりよい社会の実現に向けて必要なことや、自分と社会との関わりについて問い、選択・判断し議論を深める。

ふりかえりをする場面や視点を意図的に設定し、子どもが自分の学びを実感できるようにする。

#### 調べる学習の充実

子どもにとって社会的事象が身近に捉えられたり、思考の流れを想定したりできるように資料提示を工夫する。

見方・考え方を働かせながら、目的に応じた資料を集め、情報を的確に読み取り、整理・分析し、そこから得られた事実を相互に関連付けたり総合したりして思考・判断・表現していくことを工夫する。

#### 【授業実践予定】

《12月初旬～1月中旬》

単元：情報を生かす産業

紫野小学校 林 奈央人 教諭

鷹峯小学校 坂元 翼 教諭

《1月中旬～2月初旬》

単元：自然災害を防ぐ

待鳳小学校 成宮未希子 教諭

美豆小学校 大本 勇介 教諭

〈文責 紫野小 林 奈央人〉

## 6年部会

### ◇6年部会テーマ◇

社会の発展に寄与した先人や今を生きる人の営みから学びを深め、社会と自分とのつながりを多角的に考える子ども

6年部会では、研究部の主題設定を基に、政治・歴史・国際社会について学んだことを自分とつなげて考える社会科授業を目指していきたい。また、小学校社会科としての系統性に注目し、他学年や中学校への接続を意図しながら、部会の形を模索していきたい。さらに、教員としても学び続ける存在であるために、ニーズに合わせた勉強会を設定していきたい。

### 6年部会テーマ実現のための方策

#### 子どもの主体性を引き出す問題設定

社会科は問題解決的な学習の展開が必須である。単元、さらには学年を通して社会科学習を進めるにあたって、質の高い「問い」の設定が、それ以後の子どもたちの活動を左右するといえる。特に因果関係を問う「問い」、価値・判断を追究する「問い」の充実を目指し、単元設定を深めていきたい。

#### 子どもが自発的に進める調べ学習

子どもたちの主体性を核とした調べる時間を設定できれば、子どもたちは自発的に学習を進めることができるはずである。全体の「問い」で学級としての学習の方向性を確かめるが、子どもたち個々の「問い」も大切にすることで、多角的に物事を見つめ、考えることにつなげていきたい。

#### 持続可能な評価の探究

子どもたちの変容を促していくためにも評価は大切な役割を果たす。指導者がまとまった調べる時間の設定を心がけることで、無理なく評価を進めることができる。GIGA端末も効果的に利用することで、よりよい見取りや、働きかけを行える指導を目指したい。

#### 【授業実践予定】

・11月上旬「町人の文化と新しい学問」

京都京北小中学校 佐野 陽一 教諭

・11月中旬「明治の国づくりを進めた人々」

洛央小学校 森川 孝 教諭

・1月中旬「新しい日本、平和な日本へ」

葛野小学校 田中 百恵 教諭

〈文責 洛央小 石原 一繁〉

## また社会科談議をしませんか

極覧会 会長 砂田 信夫

當麻会長先生から、「今夏の『社研夏季研修会（以下、研修会）』の中で、極覧会からも講話をしてほしい」とのご依頼がありました。ご依頼された仮題は、『研究会活動の経験及び全国大会に向けての心づもり』という難題でした。最終的に、走井徳彦先生（極覧会副会長）にその任をお願いしました。また、極覧会のメンバーまでも、研修会に参加させていただけることになりました。感謝。

走井先生の講話は、いつしか自らが見聞した社会科授業の話となり、気が付けば、壇上では授業の一コマが再現されていました。驚いたことに、実際の授業者や会場の先生方が登壇されたり、興味深い体験的活動が再現されたりして、会場はあたかもミニ実践交流会のようになっていました。また、走井先生のわかりやすい解説にジョークも加わり、講話は大いに盛り上がりました。さらに、会場の先生方からのご質問・ご意見に対して、極覧会のメンバーにも話す機会をいただきました。はて？「昔取った杵柄」でしょうか……。社会科談議となると、未だに少々熱くなってしまいます。（小生だけ？）

さて皆さん、走井先生の講話はいかがでしたか……。 「二年後の全国大会では、こんな授業を見せてほしい（見たい）……」と、走井先生の温かく、強いエールが聞こえましたか……。 どうでしょうか……。

ここで、少し「極覧会」の話をさせてください。ご存じでない皆さんも多いと思いますが、現在の会員数は約70名。現職時に社研に所属していたら、退職後、どなたでも任意に入会できます。現職時の職種や経験年数などは、まったく関係ありません。会の目的は会員相互の親睦を図ること、社研と連携しつつ支援を行うことです。誤解を恐れずに言わせていただければ、極覧会とは、社研を卒業した仲間の「同窓会（勉強会&グルメ会）」であり、「社研の応援団」だと思っています。

9月に入ったころ、當麻会長先生よりうれしいお話を聞かせていただきました。「参加者の中に、『極覧会を身近に感じられました』という声がありました……」、と。どうやら、研修会での走井先生や極覧会のメンバーとの社会科談議が、皆さんと極覧会の距離感を縮めてくれたようです。確かに年齢の違いはありますが、昔も今も、私たちは社会科授業のあるべき姿を窮め探り、その極を覧る気魄と姿勢、叡知を大切にしてきた同志なのです。

どうです、また社会科談議をしませんか。